

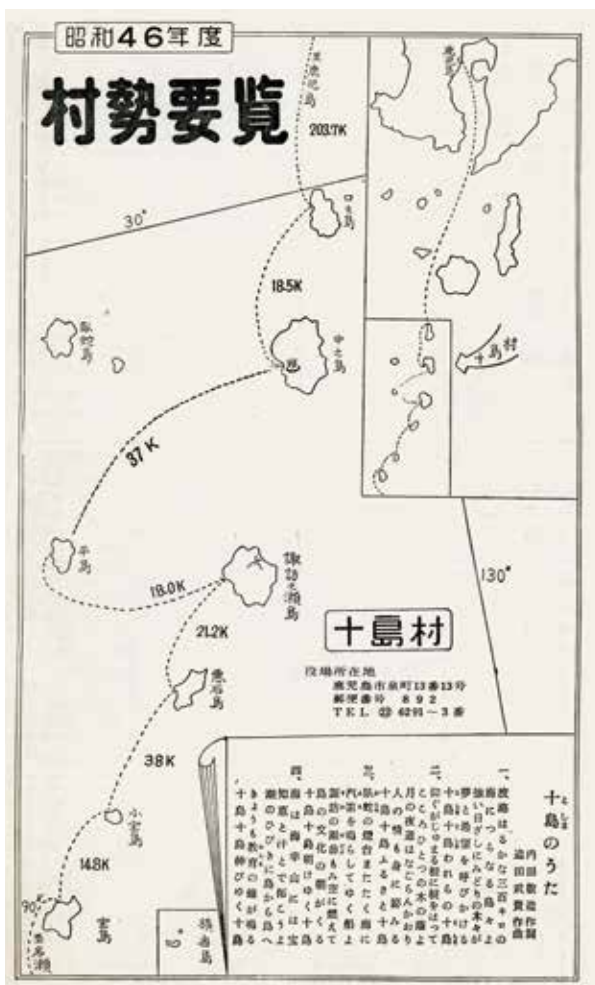
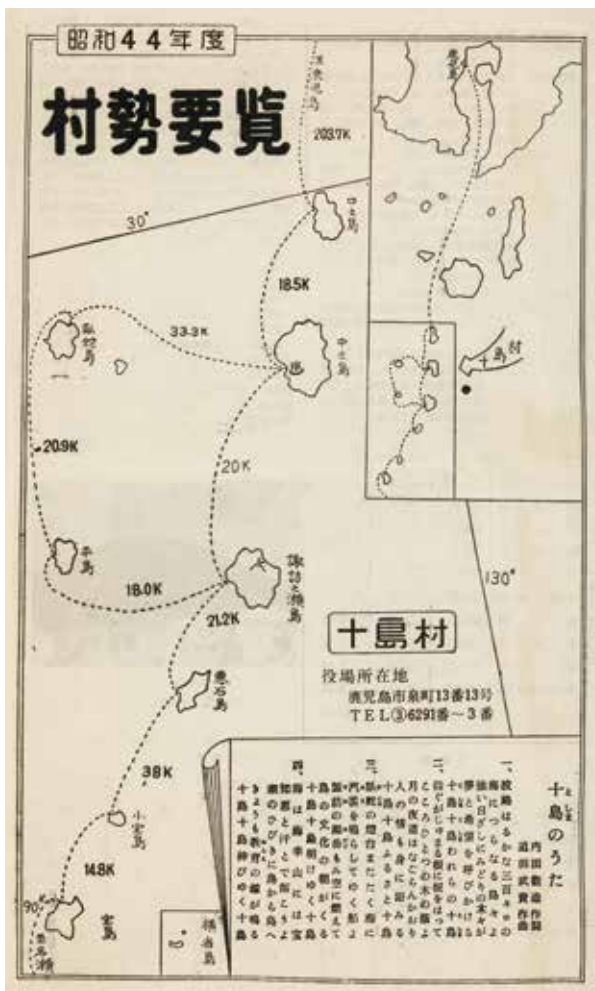
臥蛇島の記憶

臥蛇島離島50年記念誌





表紙写真：中谷吉隆氏提供 1961年撮影
このページの見開き写真：集落跡を2021年5月29日ドローンで撮影



臥蛇島離島五十年を迎えて



令和二年（2020年）は、臥蛇島が無人島となった昭和四十五年（1970年）七月二十八日から、半世紀が過ぎたこととなります。この離島五十年という節目に当たり、出身者の里帰りや慰霊祭等を計画しましたところ臥蛇島出身者の方々は勿論、子供や孫の世代から一度先祖の故郷を訪ねてみたいという声があることをお聞きし、また一世の方々にとっては体力的に最後の故郷訪問になるやもしれないという思いで記念事業の準備を進めて参りました。

しかしながら、同年一月十五日に国内で初の感染者を確認した新型コロナウイルス感染症は、瞬く間に日本全国に拡大、感染防止のためにマスクの着用、三密を控えること、あるいは移動の自粛が求められておりましたこと等から参加者の安全のために一年延期することとしました。しかし、

今年になっても感染拡大はおさまらず、ワクチン接種は進んできましたが、未だに先が見通せないことから、規模を大幅に縮小し参加人員を限定した上で、また天候の関係で数度の計画が中止となり関係者には大変ご迷惑をおかけしたところですが、この度の臥蛇島離島五十年の記念事業の開催となったところでございます。

*

臥蛇島の無人島化について思いをはせるとき、「舩（はしけ）を出す事さえできない程、人口が少なくなってしまう」という理由が心に残ります。当時、十島村全八島、全ての島で定期船が接岸できる港は整備されておらず、舩は本船と島を結ぶ命綱であったことに間違いはなかったでしょう。接岸港の整備は、昭和三十二年十月に口之島西之浜漁港、昭和三十四年八月に中之島港、昭和三十九年十月に宝島前籠漁港でようやく着手されました。

江戸時代、臥蛇島はカツオの好漁場で十島一の裕福な島であり、島津氏への年貢の上納の際、臥蛇島の郡司が十島の郡司を代表して謁見したほどです。それが近代になり、動力のついた大型船が本土から臥蛇島近海に押し寄せて操業、帆掛け舟では到底太刀打ちできずに衰退していきます。当時の日本は高度経済成長の真っただ中にあり、その波に乗って全島で家族単位での転出が続いて行

きました。

*

臥蛇島における極端な人口の減少、加えて、現在とは比較にならない程の当時の村の財政的な困窮、そのような中で、止む無く全島移住の選択がなされたのだと思います。その判断は、その時点としては最良の判断であったはずであり、当時の状況をつぶさには存じない後世の私どもが簡単に批評することはできません。ただ言えますことは、離島にとっての過疎化は、単なる人口減少に留まらず無人島化に繋がって行く危険性が含まれているということです。地続きの本土とは意味合いが大きく異なります。

無人島となつてふるさとに暮らせなくなるばかりか、その地を踏みしめることさえできない、そのことがどれだけ辛いことか、出身者の方々は身を持って体験されています。この臥蛇島の辛い経験を二度と繰り返すことがないよう、その教訓を活かしていくことが私たちに課せられた使命であるとし、今後におきましても「第二の臥蛇島を出さない十島村の村づくり」にまい進して参りますことをここにお願い致します。

令和三年十月十六日

十島村長 肥後 正司



立神



集落跡から港を見下ろす



港湾工事に使用する爆薬を保管するために掘った穴



前の浜からの登り始め、微かに道の跡が残っている



集落への最後の急登の石積みの階段



集落倉庫、水槽跡

前の浜（船着場）

「島中に1つの港湾もない。但し、島の北側の村の丘の下の崖下に数メートルばかりの船着き場がある。幸いに、北風がないときには他州の小舟が寄港することができるが、その舟は直ちに陸に揚げておかねばならない」

1884年（明治17年）、白野夏雲の著した「七島問答」には、このように前の浜の様子が記されている。



集落と前の浜は「く」の字の道で結ばれている



海面から垂直に立ちのぼる崖、集落は崖の上にある



海岸にあった灯台倉庫(右)、集落倉庫(左)は僅かに基礎が残るだけ



石垣で囲まれた屋敷跡



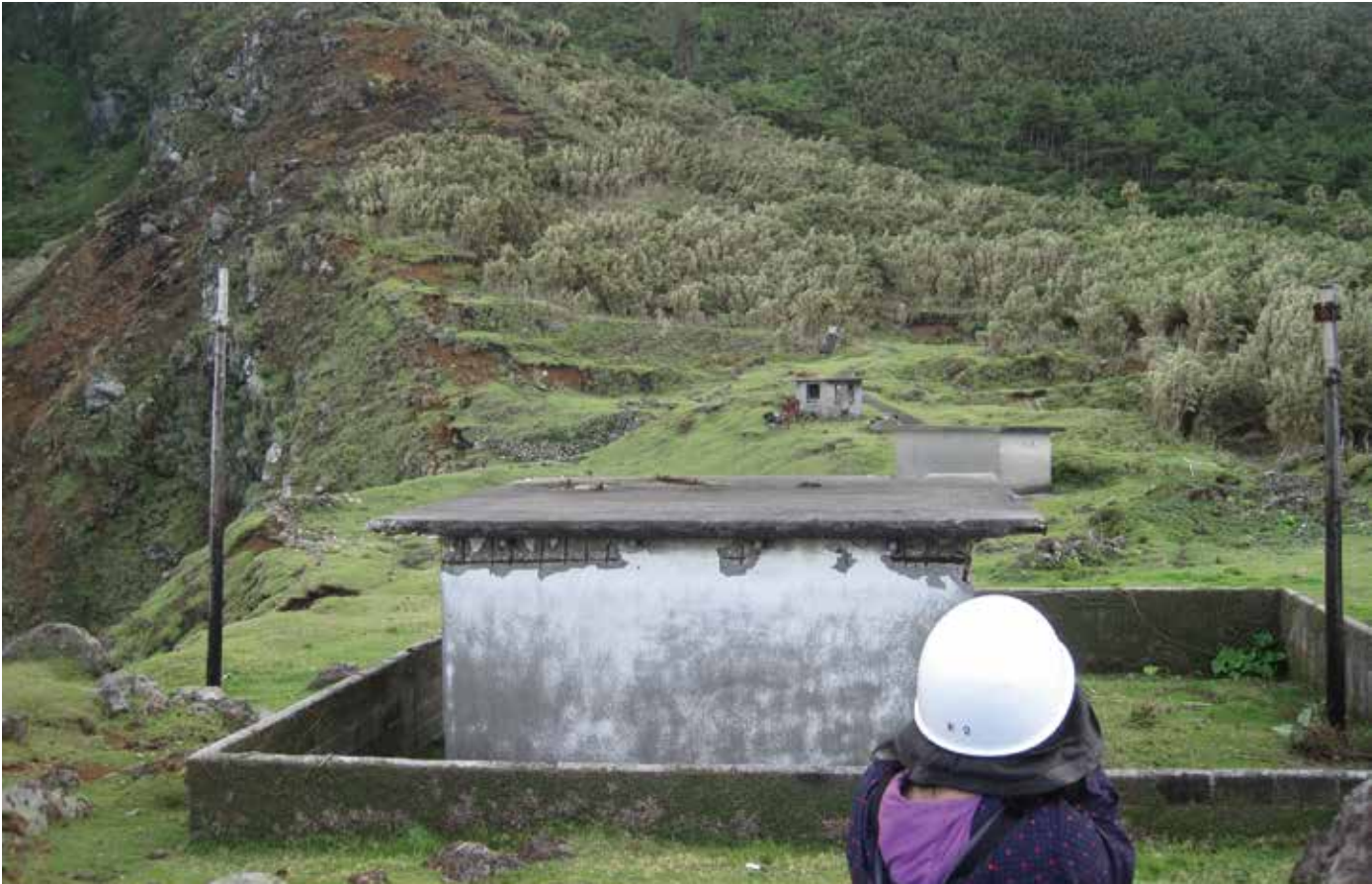
屋敷を囲む石垣と五右衛門風呂



索道用の鉄塔跡(集落と港をワイヤーで結んでいた)

集 落 跡

前の浜（船着場）から、断崖のようにそびえ立つ崖を30～40m登った所に集落跡がある。かつては、竹林の中に民家が点在していたということだが、今では、竹は集落跡の周囲を取り囲むだけで、誰かが手入れしてくれているかのような芝生の平地が広がっている。



集落北端(ミヤザキ)からブロック造の無線電話中継所、灯台倉庫、索道機械小屋、そして御岳方向を望む(2014年)



ハンタ集落跡の全景



一升瓶が散乱していた



奥に無線中継所、中が灯台倉庫、手前が索道機械小屋跡



溜池



水道タンク



コンクリート製の水桧は、ガジュマルの根に取り囲まれた



かまど跡にもガジュマルの根が



建物跡、基礎のブロックだけが残されている



瓦とレンガ積みを確認できる



学校に隣接する八幡神社敷地の端から、集落方向が望める



校舎側から正門方向を望む



学校正門の石門、銘は確認できない



一升瓶で囲った花壇の跡



学校正門前の階段とガジュマル

臥蛇島分校跡

臥蛇島分校は、総ヒノキ造りで、この島唯一の瓦屋根の建物であった。昭和19年、外国航路の貨客船が島の沿岸で座礁し、積荷の材木を捨てたことから、それらの流木を拾い、中之島から大工を招いて100㎡程度の校舎を建てたのだと言われている。とても教育熱心な島であった。

臥蛇島灯台

昭和15年10月に完成点灯するも昭和19年の米軍機爆撃により消灯、昭和30年10月再点灯。灯台職員は3人態勢で、半月ごとに交代要員と食糧・資材を乗せてやってくる130トンの灯台見回り船を島の人々も楽しみにしていた。この船の荷揚げ作業、2km先の灯台までの資材運搬は島民の人力に頼った。



灯台側面に掲げられている銘板



灯台の前にはヘリポートが整備されている



灯台からヘリポート、その向こうに御岳を望む



灯台用の職員宿舎や倉庫が並ぶ

セメント造の新神社

水神様を除いた島の“神々”のほとんど全ては、離島のさい合祀され、セメントで塗り固められた。島最後の神主、総代、区長、分校主任が八幡神社の境内に造営した。このセメントの背面には内部の神々が息苦しくないようにと小さな穴が空けられている。



合祀された新神社、右上部がいつの間にか欠け落ちている



離島する約2か月前の昭和45年5月26日に建てられている



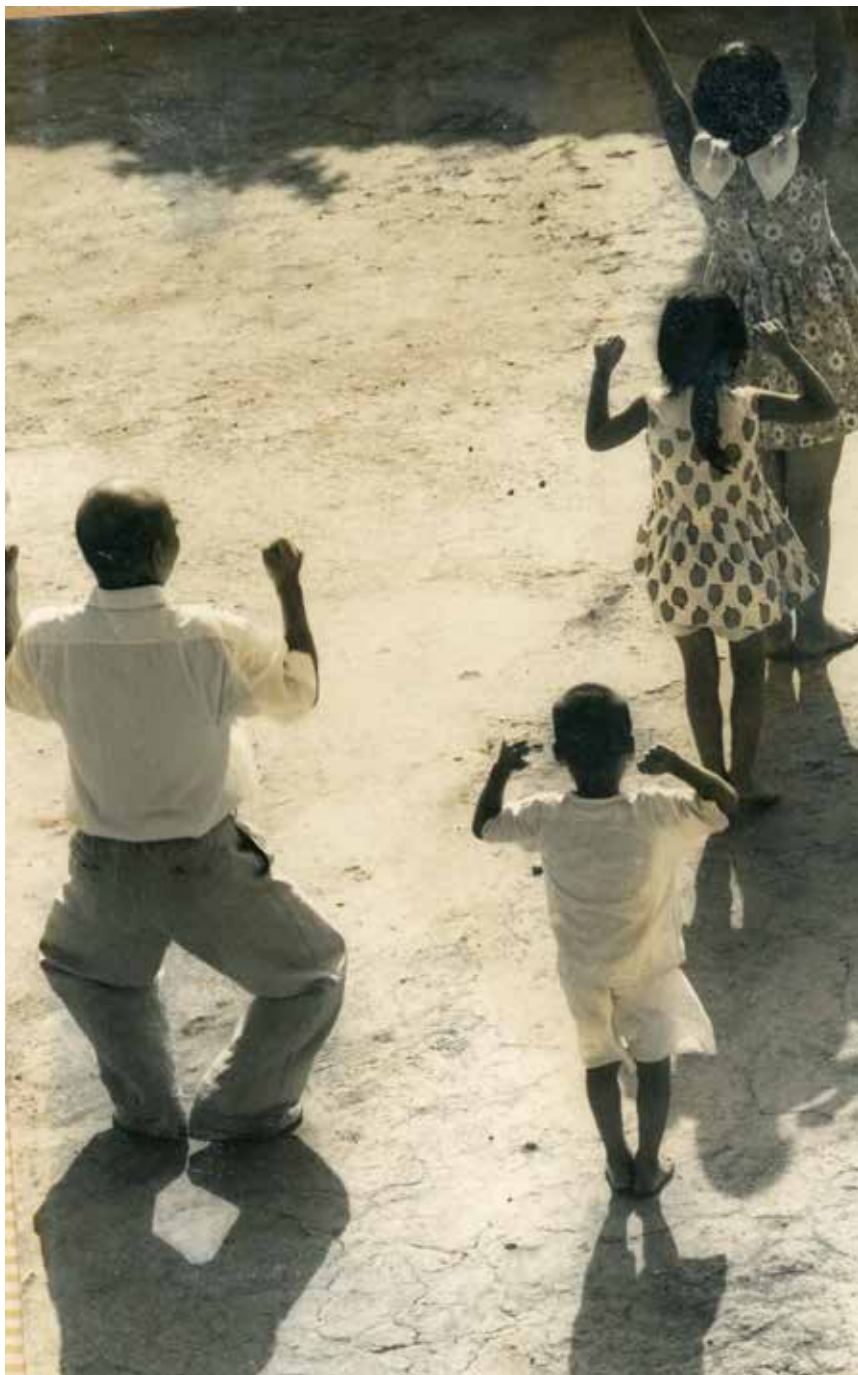
左側面に「分校主任 津曲」の文字が読み取れる



背面の穴にパイプが埋め込まれている



一人ずつ手をとるように教える比地岡栄雄先生



6時半の朝の体操から学校は始まる



絶海の孤島
切り立つ岩礁の上で11戸53人が暮らす



島の子たちは裸足で一日を過ごす



帆かけ舟で今夜の魚を獲る

かつての臥蛇島の生活風景

中谷吉隆 作品展 「トカラ列島1961」

このページの写真及びキャプション全ては、JCIIフォトサロン様、中谷吉隆様のご協力により2004年6月29日発行の同作品展写真集から臥蛇島関係分を抜粋して掲載しています。



水タンクづくりに海岸から80メートル上の集落に砂を上げる

島々を訪ねたのは、復帰
10年後の1961年(昭和
36年)夏だった。

(略)平家の落人伝説を
もつ島民たちは人情味豊
かで、古くからの風習やし
きたりを守り、助け合い明
るくたくましく生きていた。
今日では臥蛇島は無人島
となっている。

中谷吉隆

前の浜

港は憩いの場

出会いの場、そして別れの場

※このページの写真は、写真下に記載の1枚以外
全て肥後廣志氏及び肥後末男氏提供



右上沖合は第二十島丸 (写真:中谷吉隆氏提供)



沢山の荷物の中にナゴランも見られる



堤防から舢舨に向かっていつまでも手を振る



灯台補給船「若草」から降ろされた灯台燃料用のドラム缶。 背後の左の建物は灯台の倉庫、右は集落の倉庫



海保の巡視



前の浜に降りる階段 海側には手摺も確りついている



丸木舟

集 落

集落は島の北に位置し

北西に立神、南東に御岳を仰ぐ

※このページの写真は、写真下に記載の1枚以外
全て肥後末男氏提供



家は飛ばされないようにロープで固定されている



斜めに走る索道のワイヤーをバックに



集落の中に、牛も一緒に暮らす



御岳方面から集落方向を見下ろす



中央はトイレ、右下は五右衛門風呂



立派な木造住宅、入口には犬も



ブロック造の索道の機械小屋 左に矢筈岳、後方御岳



前の浜から坂道を登り切った、集落最初の家である肥後末男氏宅

(写真：肥後廣志氏提供)



かつての臥蛇島の生活風景

臥蛇島分校

昭和5年5月6日、中之島尋常小学校臥蛇島分教場として発足。昭和23年学制改革により中之島小中学校臥蛇島分校となる。

昭和45年7月閉校。

※このページの写真は、写真下に記載の1枚以外全て肥後末男氏提供



中央が臥蛇島分校、右上が教職員宿舎、左上に集落が見える



(写真: 中谷吉隆氏提供)



(写真：肥後末男氏提供)



(写真：肥後末男氏提供)



(写真：肥後末男氏提供)



分校下の「カワの浜」での水泳教室

(写真：中谷吉隆氏提供)



昭和40年7月25日 報道では「親子ぐるみの修学旅行団」と紹介された一行 (写真:肥後廣志氏提供)



放送局の見学? (写真:肥後廣志氏提供)



昭和33年6月9日 青年団・小中学生合同旅行 (写真:肥後廣志氏提供)
第7管区海上保安本部鹿児島港航路標識事務所を訪問、後方上部に横断幕も



昭和33年7月1日 寺園鹿児島県知事さんから激励のキャラメルのお土産をいただく (写真:肥後廣志氏提供)
後方横断幕には「知事さんありがとう おみやげのキャラメルは みんなにわけました」の文字が



臥蛇島離れて1年

1971年9月9日

待ちわびた墓参の日。

鹿児島から来た7名、中之島、平島へ移住した8名に加え、中之島住民なども墓参団に加わり一行は144名に膨れ上がった。

※このページの写真は、全て肥後末男氏提供



前の浜にテントを張って



魚も突いて来ました



防波堤にも荷物が一杯です



(写真:津曲正二氏提供)

かつての臥蛇島の生活風景

迫る離島

1969～70年

昭和44年度、小学校の最後の卒業式。

教師は、津曲勇、イク夫妻と日高米行先生



昭和44年度、小学校の最後の卒業式

(写真:津曲正二氏提供)



ランプの灯りでだれやめ (写真:津曲正二氏提供)



灯台 この写真のみ1961年撮影

(写真:中谷吉隆氏提供)



遠くに、懐かしい景色を見つけた



近づくふさとをただ見つめる



臥蛇島、小臥蛇島を望む

離島30年

2001年

全島移住30年訪問事業として、元住民ら34名が31年振りに島を訪れた。参加者は、緑が少なくなり、赤茶けた地肌が見える山など、その変貌ぶりに驚かされた。

※このページの写真は、写真下に記載の十島村撮影以外は、石塚順氏提供



様々な思いを胸に



(写真:十島村撮影)



定期船内で元住民に挨拶する敷根忠昭村長



竹林もまだ随分残っている



右上に索道の鉄塔がまだ残っている (写真:十島村撮影)



中之島開発センターでの歓迎会 (写真:十島村撮影)



先祖に祈る



船着場(前の浜)から集落を目指して急峻な坂を登る参加者

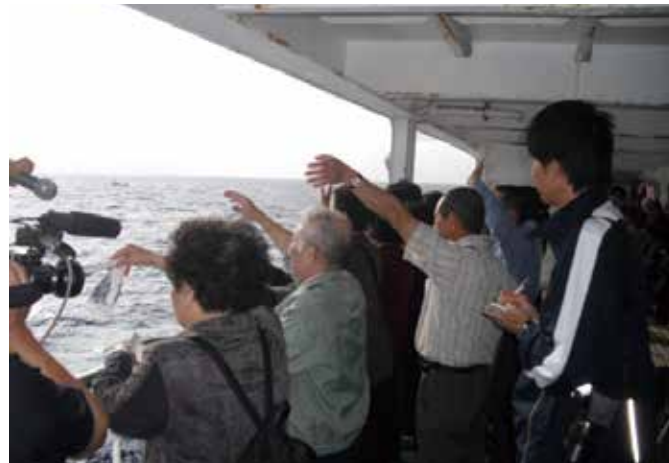
離島40年

2011年

平成23年10月22日、全国から30名の関係者が参加。中之島から臥蛇島付近を航行し平島に寄港する特別便で運航、汽笛の合図で献花や黙祷による船上慰霊を行い、式典を平島で開催した。臥蛇島上陸も計画されたが、悪天候により叶わなかった。



フェリー船上での慰霊、献花



報道機関の取材も



平成23年10月8日、事前に建立された供養碑



集落前の立神に別れを告げる



島影を見るだけで、言葉にならない



供養碑設置のため土台の自然石を削る肥後茂氏



供養碑設置のための水タンク等を運ぶ



平島での交流会



平島小中学校屋内運動場での記念式典



鹿児島港の待合所で受付を済ませて乗船を待つ



以前、村が設置した看板の残骸を発見



式典参加者の記念写真



フェリー船上で臥蛇島が見えるのを待つ



上陸はできず、島の近くを周遊する



黙祷を捧げる



記念碑の除幕式（左側：出身者の方々、右側：村長、議長等）



式典を無事に終え、安堵の中、集合写真に納まる皆さん



10/16、口之島・平島の漁船も参加者移動に協力



10/16、潮は若潮。防波堤の破損箇所をボートを使って渡る



立神を背景に記念碑が映える



10/16、出身者の皆さんが記念碑に手を合わせる

離島50年

2021年

令和2年開催予定を新型コロナウイルス感染症拡大のため1年延期し、規模を縮小しての開催となった。本番を前に4月、5月に事前準備で上陸。式典は今年に入り5回の計画延期の末、令和3年10月16日に開催。出身者4名、村議8名、役場関係者、報道関係者を含め約30名が参加。黙祷の後、記念碑の除幕を行った。



4/30、事前準備のため満潮の中、ゴムボートで上陸



5/29、宝島・諏訪之瀬島の青年も記念碑運搬に協力



5/29、出身者3名も記念碑設置作業に参加

臥蛇島離島五十年に当たり、臥蛇会を通じてその思いを募集しましたところ、次の7点が寄せられました。当初、令和2年度で式典、現地訪問を計画しており、その時点で寄せられたものもあり、実際に実施した式典内容と一部異なる部分がありますことをご承知おきください。

思い出

臥蛇の想い 肥後廣志

（七十二歳・鹿児島在住・臥蛇会会長）

島で生活していくためには、家族皆が働かなければならない時代で、学校の授業が終わり、我が家に帰ると置き手紙。「ウエバルニ テゴ モツテク ルコト」。子供ながらも、畑仕事、カライモの植え付けから草取り、収穫や水汲み、牛の草刈りに薪取り。一番苦労したのは水汲み。急にせり上がった崖をぬうように「く」の字型の崖道があり、西の窪地に流れ集まる石清水（シタンカワ）を汲み、百メートル近い崖道を伝ってテゴに一升瓶を5本と水浴びた洗濯物を入れて運んだりした思いや、途中で休み、山ぶどう（ガイビ）や桑の実、または野いちごを食べたり、フナムシ（アマミ）を獲って魚釣りしたことなど、山や海の恵みをいただきながら

臥蛇島離島五十年の思い 肥後 茂

（七十二歳・鹿児島在住）

島が離島になり早いもので五十年の月日が流れ、島のようながかわっているのが目につきます。でも無人島にはなりましたが、十島村役場や各島々の人達は今も臥蛇島を一つの島としてみただきありがたく感謝しています。離島五十年の行事で慰霊碑の建立をしていただきました十島村役場や宝島又諏訪之瀬島の人達からも手助けをもらい無事建立する事ができ、皆様のご協力に感謝いたします。

石碑を荷揚げする時、島の先人達が何千回何万回と歩いた階段を二段一段上る時、思いも最高潮に達しました。

今は無人島ですが、いつか時期が来たら十島のために活用していただきたいと思います。いい島です。今後も十島の一つの島として仲間に入れて下さい。本当にありがとうございます。

臥蛇島の思い出 有村（肥後）文子

令和2年寄稿（八十九歳 鹿児島在住）

私は島で生まれ育ったのですが、小学校三年生の時に島を離れ島外の学校に行きました。私の島での思い出は「ハンタ」のそばであったお祭りに行くために、親から「バシヨウノ木」で魚の形を作ってもらいそれを持ってお祭りに行ったこと、浜辺へ一人で弁当を持って行き、木で作った「カクドリ」を浮

生活していたあの頃を懐かしく思い出します。

夜になると、電灯が夕方の6時から点灯して、夜9時頃には消えるので、その後ランプやローソクの生活であった。海岸から集落に登るには崖道の石段が百九十段あり、第二十島丸が来るたびに島の人たちはカマスに入った米や食料品を、男は肩に担ぎ、女はテゴに入れて運び上げた。私達も山の貯水槽を造り、簡易水道を引く工事の時には、テゴに砂を入れて運ぶ手伝いをした記憶があります。

十年前（平成二十三年十月頃）に、村長はじめ議長、村議員及び役場職員の皆様のご協力により、先祖代々之供養碑を建立して頂き、残された元島民の一員として感謝申し上げる次第であります。

臥蛇の灯が消えたのは昭和四十五年七月二十八日であった。先人達の「出たくて出たのではない。やむを得ず出なければならなかったのだ」。この言葉を思い出すと心が痛む。臥蛇は私達にとっかけがえのないふるさとであり、心の中に生き続ける先祖の地である。潮の香りがふるさと臥蛇を想い起こしてくれる。

慰霊碑建立の御礼 肥後末男

（六十四歳・鹿児島在住）

この度、臥蛇島を離島し五十年目慰霊碑建立の運びとなりました。ひとえに十島村役場の方々

かべて遊んだことや探ってきたキクラゲを縁側に広げて干していたこと、また台風の際に吹き付ける強い風に「ハイハイ」と返事をしていたこと、我が家は川に一番近かったので一升瓶を背負って水汲みに行き、フデおばさんとオスマおばさんに汲んできた水を持って行ったこと等です。

島の島頂に母は畑を作っていて、そこに一緒に行くものでした。畑の回りには原野が広がり白百合が咲き誇り、そこには私の好きな苔も生え潮風と波の音が聞こえました。私はその場所が一番好きでした。

島を離れて長い年月が経ちますが、島には弟三人が眠っているので忘れることの出来ない島です。まだまだ島の思い出は沢山ありますが、ここから先は涙なしでは話せませんので皆様の苦労のおかげで思い出の詰まった島に行けることを有り難く思っています。（※注 訪問は実施できませんでした）

島の想い 平井（肥後）榮子

令和2年寄稿（七十歳 奄美在住）

父は鹿児島に行ったり来たりの単身赴任生活、兄弟七人で下の妹が三才頃父が亡くなり、まったく父の顔を知りません。

毎日が自給自足の生活、学校から帰っても勉強はそつちのかしで兄貴と牛の世話や、牧場のパンセン張りながら力がなくて兄貴に叱られたりしました。また電気の無いときは、ランプ生活や崖道の

の協力と感謝しております。

思い出せば、小学生の頃売店がある十島丸がやってくるのが唯一の楽しみで、欠航する事が多く、来ると、転がるように急な坂を下ったものです。小さい体で難儀した水汲み、重さに耐えかね転ぶこともあり、蛇口をひねると水が出てきた時の嬉しさ。ランプのホヤ磨き、割ると親から叱られる事が度々。それが、スイッチは無く、二時間ではあったが、発電機が動いている間は家の中は太陽が輝いている様で嬉しかったです。楽しみの遠足は、ポンポン船で島の周りで釣りをしたこと、年一回灯台で催された映写会を島民全員で見たこと。島に帰った時、走馬灯のように思い出されました。

【三度目の故郷を訪ねて慰霊碑建立作業に参加して】

慰霊碑建立で、崖の崩れつつある道を我先に集落があつた所に駆け上がった。草が生え、残っているブロックの遺構から集落の各家々が思い出され、周りを見渡すと、草が生い茂っていたのが、地面が露出し崩れているところもあった。

ふと、父親と夜明け前に松明を持ち、御岳に登り朝日を浴びた時、島自体、蛇がとぐろを巻いているかのように見え、立神が尾で自分達が立っている所が頭、三百六十度水平線が見れるのは、ここだけだと臥蛇島という名前の由来らしき会話を思い出した。島を離れる前、銘板に「日本国」の記載で、つくづく故郷が「無人島」だと思い知らされた。

「したん川」水くみに一升瓶をテゴに三本入れて運んだり、タキモン（薪）を取りに行ったり秋になると、うんべ（アケビ）、野イチゴ、桑の実などは貴重なおやつでした。

二月頃海岸の岩場に「のり」取りに行ったり、母の手伝いをした思いがあります。言葉に言えないぐらい厳しい環境中で、父、母が難儀して私達を育ててくれた事に感謝しています。

臥蛇島が無人島になって寂しいですが、私の生まれ故郷であり心の宝物です。他の島々が無人島にならないように祈っています。

離島五十年行事に寄せて

津曲勇、（妻）イク

（鹿屋在住・勇様令和2年9月ご逝去、享年九十歳）

私は、臥蛇島離島当時の分校主任でした。昭和四十四年、私が赴任した当時、臥蛇島分校の児童生徒は十二人で、私と妻、口之島出身の日高米行先生の三人で教育に当たりました。五十年経った今でも、その当時の子供達がどのように成長したのだろうかと思ひ出すことがあります。島の生活は、電気もなく不便できついことも多々ありました。特に、十島丸が来た時の鯀の通船作業や荷物を背負って高く狭い石段を昇る荷揚げの作業は大変でした。また、時化で十島丸が島の裏側に着いた時は、高い山を登り、崖を降りて荷物を取りに行かなければならないこともありまし

た。
臥蛇島の想い出 津曲正二

（津曲勇氏次男・六十一歳・鹿児島在住）

一方では、釣りに行つて新鮮な魚やイセエビを腹いっぱい食べたり、山羊肉の鍋を囲んだりし、他では味わえない自然の恵みを大いに楽しむこともできました。当時、臥蛇島の島民は何事にもお互いに力を合わせて暮らしていました。中でも、肥後貞則さん、高崎末盛さん及び高崎貞雄さんの三家族には、学校への協力を惜しみなくしていたりとともに、日々の生活でも親しくしていただいたので強く印象に残っています。

私は僅か一年四カ月月の島生活ではありませんでしたが、この間、教師としてまた島の生活者の一人として島民の様々な思いに触れることができました。時代の流れと島の困難な生活状況や子供の教育について、離島後の生活への不安やこれまで守ってきた島への愛着など複雑な思いがあるなかで、やむなく離島することになったやるせない気持ちがかかるようでした。今でも、離島した島民の皆さんは現在どうしているだろうかと思うことがあります。離島後、私は中之島の日之出分校に転任しました。中之島から臥蛇島を眺めつつ、合わせて五年間の十島村の生活は、私の心の中に深く残っています。私は、もう満九十歳となり足腰が弱くなり、「あいたたこらよ」と言つて日々を生きています。が、あらためて臥蛇島での一年四カ月は私にとって一生の素晴らしい思い出です。

最後に、村民の変わらない一層の団結と皆様の幸せを願っています。

少年時代の一時期を臥蛇島で過ごした者の一人として、島への想い出を寄せさせていただきます。昭和四十四年四月、臥蛇島の分校に赴任する父母と鹿児島港から第二十島丸に乗船、船は悪天候のため中之島停泊となり、三日目の朝、臥蛇島へ向かいました。初めて目にした臥蛇島は、海から突き出た険しい断崖に囲まれ、まずその姿に圧倒されました。そして、近づいてきた小さな舳に飛び乗り、また、舳から突堤に引き上げられ、ようやく臥蛇島の土を踏むことができました。離島生活を象徴するかのような船旅が始まりましたが、島の方々が総出で温かく迎えていただき、私の家族は直ぐに島民と打ち解けることが出来ました。

島では、日曜日のに釣りに出かけ、まさに自然を満喫するアウトドアライフの連続でした。もつとも、灯油ランプの明かりで過ごす夜はフクロウの鳴き声が森から響き、ラジオも日本語放送がなかなか入らず、孤島に在ることを実感せずにはいられませんでした。当時、恐らく離島の判断も間近に迫った深刻な時期だったと思われるが、島民は自給用の畑を耕し、牛を飼い、漁に出、採れた鱈や伊勢海老を島民で分け合うそれまでと変わらぬ日常を送っていたように見えました。一方で、過疎の島を取材する報道関係者や都会の若者が度々訪れ、少なからず臥蛇島への関心

が高まっていることも感じられました。私は、昭和四十五年三月末で島を離れることになりましたが、七月の離島の日を前に島へ戻り、父母や最後の島民の方々とともに臥蛇島を後にすることができました。その日、十島丸から見えた臥蛇島は、最初に見た何人をも拒絶するような荒々しい岩肌の姿ではなく、港や集落へ続く石段、灯台など懐かしさを感じさせるものでした。七島灘に屹立するこの美しい島は、他では見ることでできない豊かな自然の宝庫であることは間違いありません。加えて、人が生活するには厳しい環境ながら、小さな島で綿々と受け継がれてきた心豊かな人の営みは、深く私の記憶に刻まれています。わずか一年間の生活ではありませんが、私にとって何にも代えがたい素晴らしいこの思い出を、これからも大事にしていきたいと思っています。

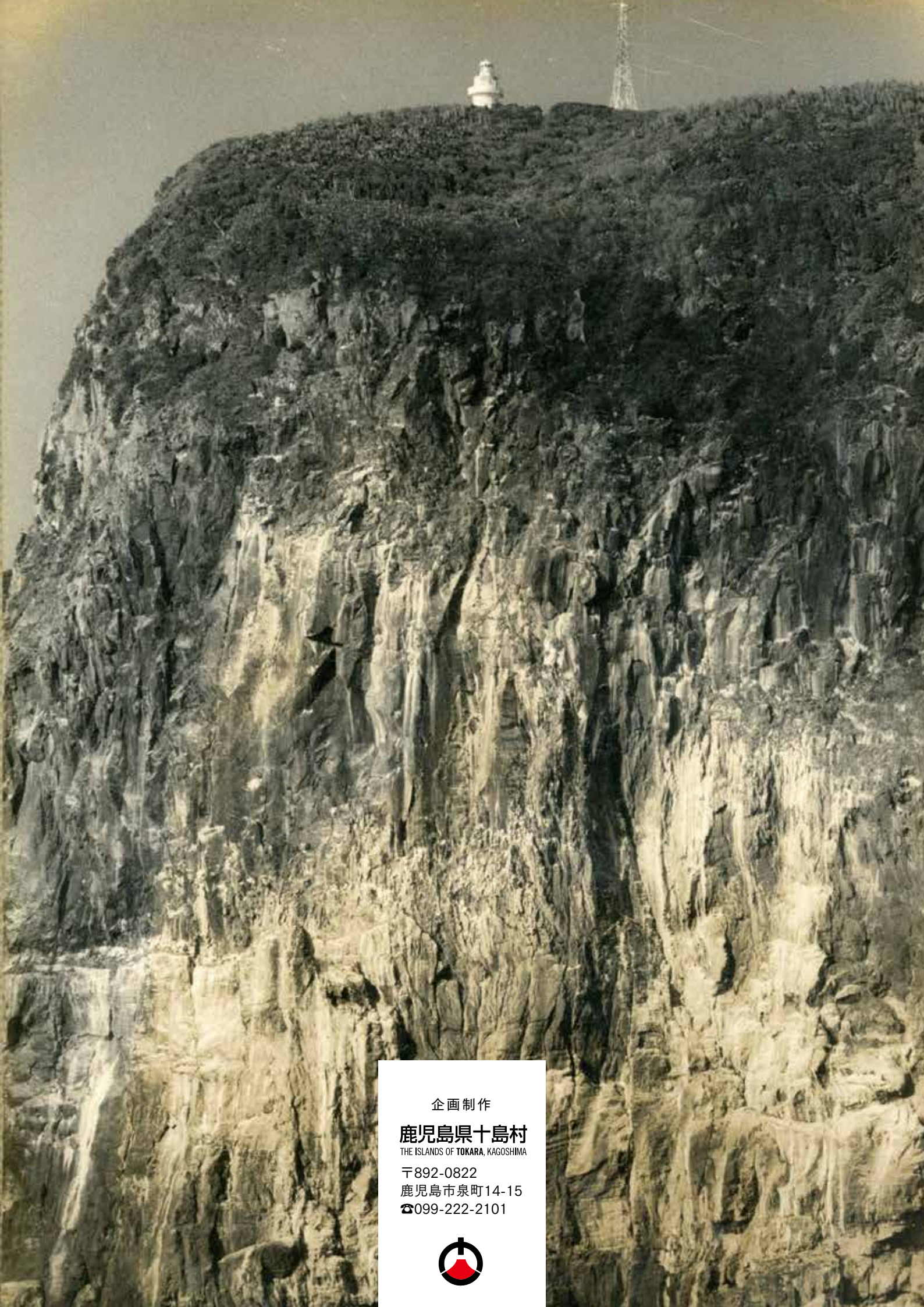
いつまでも魅力あふれるトカラ列島でありますよう祈念いたします。

十島村・臥蛇島（略）年表		
西暦	年 号	事 柄
1185	文治元年	壇ノ浦の戦いで平家が源氏に敗れ滅亡する。
1436	永享8年	島津氏は、臥蛇島と平島を種子島氏に与えた。
1450	宝徳2年	臥蛇島に漂着した朝鮮人4人は、同島が薩琉の中間にあるという理由で2人は薩摩に、2人は琉球に送られた。
1513	永正10年	臥蛇島から種子島氏へカツオ節5連、カツオ煎汁小樽、綿18把（実際は9把）を上納した。
1609	慶長14年	島津藩の琉球出兵（総勢3千余人、船艦100余隻）に際し、七島の人々が氷先案内をしその責めを果たした。その功により各島の実力者は郡司職を島津氏から公式に認められ、以後世襲化した。
1761	宝暦11年	島津氏への年頭の祝儀として臥蛇島の郡司が七島の郡司の代表として謁見し、年貢の鯉節などを上納した。
1813	文化10年	諏訪之瀬島の御岳が大噴火し溶岩が流出した。島民は島を脱出して、以後、明治の初めまで無人島となる。
1824	文政7年	宝島でイギリス坂の戦いがあった。イギリス捕鯨船が宝島の牛を欲しがっての争いであった。
1871	明治4年	廃藩置県が実施された。十島では、在藩がそのまま郡司・横目と共に行政を担当した。
1884	明治17年	鹿児島県勸業課長白野夏雲は、県令渡辺千秋の命により川辺郡十島を調査し、「七島問答」「十島図譜」を著して報告した。
1885	明治18年	地租改正による「地押調査」が十島でも実施された。それに基づき、十島も税を納めるようになった。それまでは民費だけを納めていた。川辺郡のうち十島は、川辺郡のまま金久支庁管轄となった。
1889	明治22年	川辺郡十島は、「市町村制を施行せざる島嶼指定の件」で、市町村制施行から除外された。しかし、4月1日から中之島に、中之島外9島に一戸長が置かれ十島全体を統治した。
1895	明治28年	大島郡島司笹森儀助は、5月から8月にかけて十島の島々を巡視して行政調査と行政指導を行った（「十島状況録」として残されている）。
1897	明治30年	4月、十島は、川辺郡より分離され「大島郡十島」となった。
1908	明治41年	明治22年の市町村制施行から除外されていた島嶼にも「島嶼町村制」が施行され、4月1日、「十島村（じとうそん）」が発足した。初代村長には、県知事任命の伊集院清が就任した。
1916	大正5年	行政組織の中に、一島一区長（小宝島は、宝島と一緒に）の配置がなされた。
1920	大正9年	本土並みの市町村制が4月1日から施行された。5月には、村長と村議会議員の選挙が実施された。
1930	昭和5年	4月29日、十島村公立小学校令が施行となり、5月6日、一斉開校になった。
1933	昭和8年	4月、村民多年の念願がかない村営定期船「十島丸」（155.88トン）が就航し、月間往復4航海した。
1940	昭和15年	10月、臥蛇島の灯台が完成した。以後、島民と灯台の深いつながりがあった。
1941	昭和16年	4月、尋常高等小学校の内容を改め国民学校として発足した。10月、新造船「金十丸」（鋼船570トン）が村営定期船として就航した。
1943	昭和18年	区長制が部落会制となり、中之島（楠木・里・船倉・寄木）、口之島（イ・ロ）、宝島（東・西）となり、他の島は1集落ずつだった。
1945	昭和20年	8月、終戦となった。
1946	昭和21年	2月、連合国軍総司令部の命で、北緯30度で上三島と分離し軍政下に置かれた。軍政下の大島諸島は、本土とほとんど内容と同じくする「市町村制」が施行されていた。十島村は、下七島で「十島村（じとうそん）」となった。
1948	昭和23年	5月1日、海上保安庁発足と同時に門司海上保安本部が置かれ、九州地方及び周辺海域、関門海峡近辺を管轄した。
1950	昭和25年	6月1日、門司海上保安本部は第7管区海上保安本部に改編。
1951	昭和26年	GHQから日本政府に覚書が手渡され、12月5日下七島を日本に返還することが決まった。
1952	昭和27年	2月4日、十島村（下七島のじとうそん）が本土復帰し、2月10日から（としまむら）として発足した。上三島は、同日三島村（みしまむら）として発足した。第7管区海上保安本部の管轄。
1953	昭和28年	6月、村営定期船「八島丸」（木造船70トン）が就航した。7月、離島振興法が成立し、十島村にも適用。
1955	昭和30年	10月、臥蛇島に自家発電装置の近代的な灯台が復旧した。
1956	昭和31年	4月、役場所在地を中之島から鹿児島市泉町17番地1号に移転し、中之島に支所を置いた。
1957	昭和32年	10月、口之島西之浜漁港修築事業に着工。
1958	昭和33年	4月、村営定期船第2十島丸（鋼船253.37トン）が就航した。10月、鹿児島市易居町10番11号に役場が移転した（以後2回移転し、新庁舎建設に向け取り組む）。
1959	昭和34年	8月、中之島港改修工事に着工。
1960	昭和35年	11月、「十島の歌」を制定した。12月、中之島局に電話が開通、6台の電話機があった。
1961	昭和36年	5月、口之島に電話が開通し、2台の電話機が設置された。
1962	昭和37年	1月1日、九州南部3県及び周辺海域は第7管区から分割新設された第十管区の管轄となる。
1964	昭和39年	10月、宝島前籠漁港修築事業に着手。農村公衆電話が、平島・悪石島・小宝島に設置された。
1965	昭和40年	9月、鹿児島市泉町13-13に、最初の鉄筋四階建ての十島村役場庁舎が完成した。
1966	昭和41年	農村公衆電話が、臥蛇島に設置された。
1969	昭和44年	8月、鹿児島市に鉄筋四階建ての十島会館が完成した。
1970	昭和45年	7月28日、臥蛇島島民3世帯14人（教職員を含めると4世帯16人）が島外へ移住・転出し、無人島となる。
1971	昭和46年	鹿児島から来た7人、中之島、平島へ移住した8人に加え、中之島住民など一行144人の臥蛇島墓参団。
1975	昭和50年	3月、臥蛇島灯台に太陽電池装置と組み合わせた小型ハロゲン灯器を日本で初めて採用した。
1976	昭和51年	3月、臥蛇灯台にテレメーター式気象観測装置（風向・風速・気圧の自動観測と送信可能）が設置された。
1978	昭和53年	3月、臥蛇島灯台が大型太陽電池式灯台に生まれ変わった。
1980	昭和55年	12月、現在の鉄筋四階建て役場新庁舎が鹿児島市泉町14-15に完成した。
1991	平成3年	10月15日、臥蛇島西方海域でベトナム難民を発見。ベトナム人12名を巡視船に移乗させ鹿児島港で入管に引き渡した。
1996	平成8年	12月6日、灯台見回り船「ずいうん」が航路標識点検のため臥蛇島灯台を訪れたところ、中国漁船からボートに乗り換えたのち泳いで不法上陸した中国人6人を発見、逮捕した。
2001	平成13年	本土復帰50周年記念式典を中之島で開催。臥蛇島全島移住30年訪問事業実施。
2011	平成23年	本土復帰60周年及び臥蛇島離島40年記念式典開催。
2014	平成26年	2月5日、平島においた男女2名が、ゴムボートに乗り港から出て行き行方不明。鹿児島海上保安部は、航空機を出動させ平島周辺を搜索。翌日早朝から「巡視船さつま」を出動させ臥蛇島に上陸している男女2名を発見、巡視船に収容して鹿児島市まで搬送した。
2021	令和3年	10月16日、臥蛇島離島50年を記念した式典を開催。



昭和38年頃の集落の全景写真と思われる（肥後末男氏提供）。ブロック造の建物はまだ索道の機械室1棟（中央上）しかなく、電話の無線中継所、灯台倉庫もまだない。右上の船は、灯台見廻り船の「ずいうん」。周辺海域は福岡に本部を置く第七管区の所管であったが、組織改編により昭和37年から鹿児島市に本部を置く第十管区の管轄となった。

裏表紙は、洋上からの灯台、JCIIフォトサロン様、中谷吉隆様のご協力により「中谷吉隆作品展トカラ列島1961」から掲載。



企画制作

鹿児島県十島村
THE ISLANDS OF TOKARA, KAGOSHIMA

〒892-0822

鹿児島市泉町14-15

☎099-222-2101

